

横浜歌人会 会報 109号

目次

- | | |
|------------------------|--------|
| 01 新たな飛躍を信ず 代表を退くにあたって | 千々和久幸 |
| 02 新代表あいさつ 歌の力にひかれて | 平野久美子 |
| 02 新年歌会の記 | 野一色容子 |
| 04 第四回文学散歩・即詠歌会の記 | 稲垣紘一 |
| 05 運営委員の抱負 | 吉野裕之 他 |
| 09 会員歌集紹介 | 後藤恵市 |
| 10 編集後記 | |

新たな飛躍を信ず

代表委員を退くにあたって 千々和久幸

この一月で二期四年努めさせて頂いた代表委員を退くことになった。志を同じゅうする後進に道を譲ると言えば格好が良いが、実情はままならぬ周辺の事情で進退これ谷ま^きつての退場だ。ついでに住処も横浜から平塚に移って、もう横浜市民ではなくなつた。この3月、4月身辺はいぜん騒然としている。

さてわたしの役割は、老大国化した組織に新しい風を入れることだった。運営委員でありながら、弛緩した横浜歌人会の現状を批判したばかりに、言い出しつpegがその責任を負わされる羽目になったのだ。

そこで先ず横浜歌人会の理念を明確にし、新たな規約を制定した。そしてその理念のもとにこれまでの定例行事を見直し、新機軸を付加して活動の幅を拡げることにした。

新春歌会、観月歌会は儀礼的なものから漸次密度の濃い歌会に組み替えていった。批評は第二評者を立てるなど作品理解の精度を上げた。また研究会は広く他の文芸ジャンルにまで裾野を広げ、「表現と言葉」の原初に踏み込んだ。にぎわい座での落語鑑賞今夏の説教節の鑑賞などはその試みの途上にある。

さらに吟行会を加え定例化した。郷土の横浜を知ると同時に、即詠の腕も磨くことにした。即詠会と

雖もお座なりの遊びではなくなつた。こう書けばいかにもお堅い印象を与えようが、目指す先は「戦闘的に学び、小鳥のように遊ぶ」がモットーである。

幸い有能な運営委員及び事務局員を得て、目論見通りの運営が出来たと信じている。会員も会合の度に増えていった。すべては会員の暖かなご支援とご協力のお陰であつた。退任にあたって心より御礼申し上げます。

かくて横浜歌人会は新たな海に向かって漕ぎ出した。ここまでの仕事は実を言えばさほどの困難を伴つた訳ではない。「創業は易く守成は難し」の故事通り、これからの胸突き八丁だろう。これからの差配はすべて代表委員の平野久美子さんに委ねてある。彼女なら彼女のパワーと人柄ならば、横浜歌人会の将来は盤石である。私は吉野裕之、高尾文子副代表委員以下の新たな運営委員の意欲と能力を信じ、大きに期待している。

どうか大いに議論し、大いに勉強し、大いに遊び横浜歌人会を厳しく楽しい会にして欲しい。高い次元で歌が語れてスマートに遊べる会、即ち横浜歌人会の地位の向上にご尽力願いたい。熱心な会員の引き続きの後押しと、新たな運営委員の総力を結集すればそれが可能だとわたしは信じている。

横浜歌人会が「世界で最もエキサイティングでチャミングな会」であることは永遠の願いである。言い換えれば余所のどの歌人会より内容が濃く豊か

で、会費が安く楽しく、誰からも羨ましがられる会
ということになるのか。欲張ることを恐れまい。
横浜市民ではなくなったわたしもこの先、能う限
りみなさんの顔を見に行きたいと思っている。

新代表就任あいさつ

歌の力にひかれて 平野久美子

思いもかけぬことに「横浜歌人会」の代表を務め
させて頂くことになり、緊張しています。この四年
間は千々和代表の言葉のように「戦鬨的に字び、小
鳥のように遊ぶ」楽しい横浜歌人会をめざして、運
営委員の一員として、千々和代表について常に駆足
で過ごして参りました。今後もこの意欲的な路線を
引き継ぎながら走り続けられるよう願っています。

とにかく歌が好きで、それだけに集う横浜歌人会
には自由さと面白さを感じておりましたので、代表
を務めさせて頂くほどの器ではございませんが、新
しい運営委員の皆様はとても頼もしく、今後の即詠
会のプランも広がってきております。

会報につきましても、より多くの情報が発信でき
るよう話しあっております。原稿依頼も増えるかと
思いますがご協力をよろしく願います。

会員の皆様は、それぞれのフィールドを持ち、学
び、歌集を編み、多忙な日々を送る方達ばかりです

ので、会の予定は速やかにお伝えしたいと思えます。
七月十八日金曜日、「かながわ労働プラザ」に於
て「説教節の会」を行います。近々ご案内が届くと
思いますので、今から予定に入れて、是非ご参加下
さい。

「観月会」や「新春歌会」での批評もより広くで
きるだけ会員の発言をふやして行きたいと思えます。
思いがけぬ意見や辛口の批評でも関連に交換でき
る場でありたいと願っています。エキサイティング
に学び小鳥のように遊ぶ横浜歌人会をめざします。



新年歌会の記

エキサイティングな歌会 野一色容子

一月二十六日、馬車道十番館へ。とりあえず新年
歌会の詠草集と辞書だけは忘れずにと急ぐ。階段踊
り場のレトロな装飾品を愛でながら階段をのぼる。
受付で昨年のごとくトランプカードの中から好きな
カードを選ぶ。これで席順は、運の向くままカード
次第ということになる。私は黒のジョーカーを選ぶ。
去年はハートの6で（しかも二回の繰り上がりで）
十番館のビスカウトが当たった。私は、その弱運な
がら末吉的な「ハートの6」を詠んだ歌まで作った
ものだ。

一時からの総会議事も滞りなく進行し、新役員も
決まり、二時からいよいよ新年歌会だ。吉野新副代
の司会進行のもと、全四十六首につき第一評者も第
二評者も簡潔に話を纏められトントン進み、終了予
定より二十分以上余して最後に質問タイムを設ける。
つつこんだ意見交換あり、自歌自註ありの挙手活発
な時間となった。千々和前代表がこの日のご挨拶で
述べられた「我々の目標はエキサイティングな会
をさつそく実践したような濃密な時間だった。

懇親会の前、会場のセッティングを待つ間、別の
部屋で小テーブルを囲んで小休憩。雑談をしながら
も詠草集を拡げて歌評の続きをするテーブルもある。
バイキングの懇親会では、一人一人マイクを持ち、
ぶっつけ本番ながら、どなたも堂々とユーモアを交
えてスピーチされ、引き込まれて聞き入った。「言葉」
に魅せられたこの場の人々は、文字の上だけでなく
声に出しても達意の人であると感心した。思いを伝
えていくために上句から下句へ順次言葉をつなげて
ゆく作歌の技量が、スピーチにも生きているのだろ
う。



詠草—横浜歌人会新年歌会詠草

平成二十六年一月二十六日(日)

馬車道十番館

・青空に斜線一すぢ白く引き飛行機一機どこまでも行く
田谷 幸子

・満員の電車の座席ひとつ空きみんなピーンと張り詰む一瞬
後藤 恵市

・壇蜜と言う名の女優不快なる微笑を見せて中吊りにあり
小笠原 信之

・来む春の花はともあれ小春日のテラスに出でて鉢の手入れす
杉下 幹雄

・かつてには身のかるき日のありしよとつつと走るすぢめ見てをり
平尾 眞

・金色の孔雀枝垂尾街をかざりイチョウ晩秋のよそおいこらす
野崎 美智子

・一枝の松の表裏を見定めて明るき部屋に鳴る花鉢
平野 久美子

・茶に褪せしえのころぐさは降るゆきのおもさに伏せてゐたり空地に
小島 熱子

・チェンソーの音遠くなり近くなりこの丘の木立すでに切らるる
伊東 宏見

・庭に出で深く息吸うその香濃き夕しる著く冬のジンジャー
伊東 美枝

・三島手に若やかなもの注がれて冬の時間と思ふあなたは
吉野 裕之

・しめきりの迫る原稿書きなすみ夢にも出で来小さき柀目
朝井 恭子

・さきはひの灯のごとき金柑の葉陰の棘にふれておどろく
野一色 容子

・スーパールの屋上駐車場冬雲の檻襖しづかに神さぶるごと
川井 怜子

・新春の光満ちある庭に遊び赤き実啄む数羽の小鳥
中村 規子

・寒卵呑み込むきわに目覚めたり恵みは初の夢の先かも
堀部 知子

・晴れわたる港の岸边優々と波の寄りつつ年あらたまる
相沢 一男

・植木市冷やかしながら色づきしみかんの生れる苗木購ふ
藤田 絹子

・「まもなく渋谷」と放送ありてからが長し本も眼鏡もしまひたりしよ
時本 和子

・ひよんなこと生まれてここへたどりつき七草粥を炊きこぼしをり
角宮 悦子

・盆栽を土におろせばのびのびと大樹となりて紅梅は咲く
荻谷 君代

・ニコライ堂の塔に月光射し入れど僧は経營の困難を問わず語りす
片野 浜子

・初春に杜甫の詩讀めばいまだ在り傾命の吾れに飛動の意
松本 嘉猷

・この世から見えます夫が淑やかで無口な女性を探しています。
原 昌子

・新葉の開発なりし朗報の記事切り抜きて一日を終ふ
森 藍火

・林のなかの落葉・どんぐりつかみある小さなる手は冬日もつかみ
山本 登志枝

・にいはわが六度目の干支なれば駿馬となりて足を鍛えん
綿貫 昭三

・ガレージのいたく濁った水槽にときおり赤くきらめく鱗
嵯峨 直樹

・あの人もこの人もみな美しき 二度目の精密検査に向かふ
出口 十三

・かぎりある祝祭だらう冬の虹あふぎつつゆくそばへに濡れて
保田 斐佐子

・炎と燃ゆる空を後背に遠々に小さき富士見ゆ地平に低く
渡辺 謙

・桃色は黴の前触れ歳晩に桃色あまた桃色に更ける
長野 道子

・嬰兒のあくぶがごとく蝨梅はぼうと開きぬ正月三日
中川 暁子

・ひとたむろさくくともみちを浮かべつつ夕潮引きぬ竹橋の下
土屋美 代子

・切り抜き裏側の方が欲しかった記事は半分だけが残って
松井 芳子

・隅田川七福神を詣で来ぬ友と語らふ其れ其れの道
下田 聰子

・押入の奥に忘れし手帳より吾を見つめる息子の一首
間 ルリ

・いたずらに言葉重ねるむなしさよ真実赤き万年青の玉実 井澤 幸恵

・義理よりも不義理の多くこの年もいつしか師走半ばを過ぎつ 千々和 久幸

・冬に入る日差し春日の皮膚の風たかき枝のほのか紫 高橋 みずほ

・啄木も多喜二も嘆く現世の「唇寒し・・・」行く年来る年 田之口 久司

・父母の手による虐待死の記事哀れ 佳き文字ばかりの命名あはれ 高尾 文子

・鰯大根ほめて帰りし息子なり娶らずにいる歳月思う 新田 由美子

・息を呑む大夕焼けに背を押され誰も無口に坂を下れり 長野 義和

・偲ぶ会果ててしぐるる街の中自動車が過ぎ傘がすぎゆく 俵谷 晴子

・玄界灘今日しづかなり 鵜の青美しきふるさとの海 河北 笑子

・平仮名のりんかい線に頭ち生れる原発のおと蒼々とせり 中川 宏子

・鶴の高速飛行を写し止め百舌の声にて高笑ひせり 真鍋 正男

・日本の働きものの在来馬 午年われは憧れており 中川 佐和子

・風ぎにける海はも冬の気配せりかそかにゆらくみずを見ている 桜井 健司



第四回文学散歩・即詠歌会の記

キリンビール工場見学 稲垣紘一

「第四回文学散歩・即詠歌会」が4月23日(木)行われた。参加者は23名。京浜急行生麦駅から徒歩10分ほど先の目的地キリンビール工場へ。

一昨年の夏にリニューアルした庭園にはアカハナミツマタ、ビヨウヤナギ、ハギ、クリスマスローズなど四季折々の植物が植えられているとのこと。柔らかな芝生の緑が目によさしく、風にそよぐうすべに色の花木が印象的だった。

研修生の案内で「キリン一番搾り」の製造工程の説明を聞いた。麦芽の試食や麦汁の試飲も体験。

- ① ビールの原料は麦芽とホップと水。横浜工場では相模湖水系の水を使用。風味付けのホップは麦芽の甘味と調和のとれた苦味を与える「ビールの魂」といわれる。

- ② 「キリン一番搾り生ビール」は、一番搾り麦汁のみを使用し、渋みが少なくさっぱりしたビールに仕上がるのだとか・・・。

「ラガー」「一番搾り」「淡麗」「のどごし生」など十数種類もある製品をビール、発泡酒、新ジャンルに分類するクイズでは満点の好成绩。満点を出す団体は珍しいと褒められて思わず歓声があがる。この

あと、ビールの試飲（3杯までOK）を楽しみ、帰り際に「ゲグッと」のどごし最高UP」と各自「呪文」を唱えさせられてお土産を貰った。

意外に人影の少ない工場内、深さ7メートルある容器（魔女の大鍋に喩えた方がいた）が立ち並んでいる不思議な光景、容器の中でビールの妖精たちが舞い踊っているのを想像しながら、即詠会場に向かった。



詠草―横浜歌人会第四回即詠歌会

平成二十六年四月二十三日(水) 生麦地区センター

・「淡麗」と言う名の美しき発泡酒細かき泡を無数に立てて
伊藤 美枝

・工場でのビールひときわうましと言う人うらめしく我はジュースを
井沢 幸恵

・わが歌にコクと旨味の足りぬ訳麒麟ラガーに教はりてをり
稲垣 絃一

・去年の葉を樹下に落として常盤木の芽立ちそれぞれ異なるみどり
河北 笑子

・とりあへず途中下車して歩み出す生麦といふ夜明けの駅に
角宮 悦子

・銀色に輝く巨大なビール釜いい湯だらうな入りてみたし
後藤 恵市

・人口灯明るく照らすビール工場酵母の醸す音は聞こえず
工藤 こずえ

・一角獣麒麟のいざなふところまで春の陽あはだつ野のはたてまで
山本 登志枝

・陽のほひするホップの芽手にとりてチエコザーツなる野を想ひたり
時本 和子

・ビールはアサヒときめておりしが出来たての一番搾りに心揺れおり
小笠原 信之

・日のなかにうすべにいろのはなみづきうつつだらうか酔ひつつ見をり
小島 熱子

・石炭をボイラーに焚く技得にしビール工場に伍のまぼろし
小林 勝

・できたてのキリンビールのおいしくてついと頂く顔赤くして
石田 幸子

・働ける人影は見ず映像と説明を経てビール工場去る
早島 和子

・一番搾り美味しく飲めりアルコール全身にまはりふはふはとする
中村 規子

・遠き日の歴史の授業想い出す「生麦」駅に人を待ちつつ
朝井 恭子

・歌人ら試飲のビールにほろ酔ひてゆく春の日の一期たのしむ
田代 弥生

・研修生案内人の稚さよし工場見学あつげなければど
渡辺 礼比子

・ほろにがきモルツジュースにうるほへり見学しつつ渴けるのみど
土屋 美代子

・碑のひとつ生麦事件をつたへつつ国道わきにひっそりと立つ
平尾 眞

・麦とホップはいつ出会いしや喜びに幾世世かけてグラスを掲ぐ
平野 久美子

・かの森に魔女の大鍋ありしこといま爽やかにビールを作る
野一色 容子

・盛り上がる笑い声と輝きと緑のなかに人たちがいて
高橋 みずほ



運営委員の抱負

運営委員の抱負

横浜のもつ力

副代表委員 吉野裕之

横浜は、素敵なまちだ。新しいもの／ことを受け入れ、多様なもの／ことを認める、そんなしなやかさが魅力を形づくっているのだと思う。歴史や地理のありようが、それを支えているのだろう。

千々和久幸・前代表委員は、「世界でもっともエキサイティングで魅力ある組織に、会員誰もが愉しく寛げる組織に」を合言葉に、この四年間、会の活動

を推進してこられた。多くの成果を得、会員のみならずも今後のさらなる充実を期待されているはずだ。

表現とは、社会的なもの／ことである。けっして個人的なもの／ことではない。社会のよりよいありようについて思いをめぐらせ、たとえば短歌であれば、ことばの力によってそれを提示する営みであろう。むろんそれは、明解な形をもってはいない。だからこそ錯覚することなく自覚し、明解な形をもってはいないもの／ことに向かつて、ことばの力を育んでいかなければいけないのだと思う。

それは、いわば半歩先を見ること。この四年間の試みは、半歩先を見る試みだったのだと思う。だからワクワクするし、ときに不安になることもある。半歩先は、まだ明解な形をもってはいない。だから、ほんとうにこれでいいのか、大丈夫なのか、そんな気持ちになるのだ。

しかし、私たちは横浜のもつ力を信じていた。新しいもの／ことを受け入れ、多様なもの／ことを認める、そんなしなやかさ。むろん、これからも信じている。

思い出の横浜歌人会

副代表委員 高尾文子

横浜歌人会の会員になって早二十年余になるだろうか。第一歌集出版のあと、歌の師である馬場あき子が結社外の交流も少し広げてはどうかと、厚い親交のあ

った当時の代表、杉本三木雄氏に私のことを頼まれたようである。初めて参加した会場では角宮悦子さんに声をかけていただき、以来今日まで多くの歌人の方々の貴重な出逢いに恵まれた。

畑和子氏が次の代表になられたとき、運営委員を依頼された。「お断りにならないで下さいね」と勧められた電話のやわらかな言葉と声が、今も心に残っている。晩年癌を病まれた畑氏を、新宿の大病院にお見舞いにかがったことがある。病室の窓から暮色の街を見下ろしながら「帰りたくなるとすぐにタクシーで帰ってしまうのですよ」と、横浜への熱い「思郷」をしみじみと語られた。

つい「思い出の記」めいてしまったが、こうして顧みると、歌人会が歌と人との繋がりを大切にして歴史を積み重ねてきたことが見えてくるのである。

その後、順次代表を引き継がれた熊沢正一氏、草柳繁一氏、塩野崎宏氏らのお名前もここに掲げておきたい。美しい国際港都・横浜に息づく歌人会のあり方も、時代の流れと共に変容し、新生し、前進しなければならぬだろう。微力な私だが、会員一人一人の豊かな知恵と協力を得て、新年度の行事を楽しく意味あるものに出来たらと思う。

最後に、多岐にわたりご尽力下さいました千々和久幸氏、事務局の長野義和氏にお礼を申し上げ、今後ご教示をよろしくお願いいたします。

地元の会の楽しさを求めて

中川佐和子

短歌を作っている人は、果たして全国でどのくらいだろう。横浜に住んでいる人は、今年四月の横浜市ホームページによれば、おおよそ三百七十万人だそう。日本の市町村のなかで、横浜が一番大きな市である。

これだけの人口の横浜だから、短歌を作っている、横浜の人にもっと出会ってもよさそうなものである。ところが横浜歌人会や神奈川県歌人会など、横浜や神奈川にかかわる集まり以外で、横浜在住の人に顔を合わせることは、不思議なことにそれほど多くはない。それというのも、それぞれの短歌の結社、あるいはサークルでの歌の会の活動に追われていたり、そこでの仲間たちとの会に充足していたりするのかも知れない。そういうことも、とても意義があるし、大切であることは私自身も経験しているのでよく分かっている。

しかし、それだけではないものを、それ以上のものを私は欲するようになっていく。同じこの横浜に縁があつて住んでいるという嬉しい繋がりによって、結社や参加している会などは違ついても、もつとお互いによく交流しながら短歌にかかわっていたいという思いが強くなつてきている。恒例の秋の観月会や新春歌会もせつかくの機会であり、文学散歩や研究会などにも、日程を合わせ

て出掛けようと思う。短歌についてゆっくりと考えることができて、何よりも参加して楽しい地元横浜の会を目指すために、微力ながらその活動に積極的に加わっていききたい。

決意とも抱負とも

稲垣紘一

さて自分はいつ入会したのだろうか、あらためて会報の綴りを開いてみた。2009年1月20日発行の第94号の末尾に私の名前を見出した。

あれから五年、色々な事情があったとはいえ、行事に参加することが、本当に少なかつたなあと反省しきりである(研究発表会3回、シンポジウム、ぎわい座、文学散歩2回)。94号には、千々和久幸さんが「病める組織を蘇生させよ」という“檄文”を寄せて、かなり強い口調で組織の蘇生を訴えている。千々和さんは「組織としての目的意識の希薄さ、低さが会(横浜歌人会)を微温化し、組織が内包する活力を奪っている」と指摘した。

私は前述のように、この五年間休眠状態だったので、“組織蘇生”をめざして、その後どのような進展があったのか詳しいことはわからない。ホームページの開設がおこなわれたり、会報が大版になって紙面の充実が図られたり、研究会などの活発な取り組みもこの間の着実な前進の証左だろう。運営に携わってこられた方々に敬意を表したい。とともに新た

に運営委員に加わった者としてこれ以上の何ができるのか少し不安でもある。

まずは件の「組織としての目的意識」とは具体的にどういうことをいうのかを、自分自身に問いかけて、自分なりの納得できる答えを出せたらよいがと思っている。参加することが楽しいと実感できるような組織の在り方や会員のニーズに応える多様な行事計画についても検討したいと思っている。勿論、「ヨコハマ」の特色を生かしてである。

楽しく刺激的に

朝井恭子

「楽しく刺激的に」は前会長の千々和久幸氏が会のモットーとして表明された言葉である。初めて耳にした時にはいささか戸惑い充分な理解が出来なかった。楽しく、は分かる。だが「刺激的」とは何を意味するのか。帰宅して改めて広辞苑を開く。とそこには「何らかの反応をひき起すこと」という意や「気持ちを興奮させること」の説明があり私なりに納得した。千々和氏の「シゲキ的」は互いに反応し合い歌心と感性を高めて行くことではないかと。

四月二十三日の吟行会で私はその言葉を実際に体感した(正式な名称は文学散歩)。今回は生麦のキリンビール工場に行く。生麦駅に集合したのは総勢二十三名。多からず少なからずの参加数である。「生麦」の地名は十代の頃歴史の授業で学んだ。島津藩士が

イギリス人を刀で殺傷した事件である。「こんな処で」と日本の夜明け前の時代に思いを馳せる。

ビール工場は手入れの行き届いた広い庭の奥にあった。見学コースから見える工場内には人影が全くない。女性案内人の説明を聞きつつ、人間同士の争いも恐いがコンピューターに管理され支配されるのはもつと怖い等と心は別の事を考えていた。やがて「待ってました」の試飲タイムになった。皆笑顔になったのは素直に反応したからだろう。場所を移しての吟行会は当日の最高の盛り上がりを見せ、刺激的だった。参加者全員が生き生きと意見をのべ合い語った。歌の素材もビール工場で直接触れたホップを詠む歌や商標やビールの味、更には庭の花の美しさと多彩で楽しい。勿論地名に関した歌もあった。

憧れの横浜

山本登志枝

・沖に出でていつばいに風をはらむ帆上遠くより見ればただに静けし

・道はたに諍へる異人のそば過ぎて噴水光る公園に出づ

・静かなる旅の終りよ外人墓地かたへに見つつ坂くだけりゆく

大西民子の『不文の掟』「カナダまで」の横浜の港での歌と思われる三首をあげてみた。晩年の父の勤

務先の陸前高田、新婚の幸せなときを過ごした釜石の潮の音は、民子の心に何時も聞こえていたようだ。大宮に来てからは海を見なくなるとき、よく横浜に来たのだという。昭和の三十年代は、大宮から横浜はちよつとした旅であったのだろう。

私にとつての横浜もかつては旅人として港、異国、海風に会いに行く憧れの地であった。

憧れの横浜に住んでも東京生まれの私は、しばらくは東横線で多摩川を越えて東京になるとほつとしたが今は違ふ。いつのまにか横浜の住民になつていて多摩川、鶴見川と越えるたびにほつとする。

横浜で、歌人會に入會し、横浜の歌人の方と知りあへ、即詠會などで、まだ知らない横浜にであえるようになったことは嬉しいことだ。

これからも、短歌を通し、そして歩いて、横浜という地を知つてゆきたいと思つてゐる。

今年度から、二年間會計をすることになりました。不慣れで、ご迷惑をかけることもあるかも知れませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

横浜歌人會のレーゾン・デートル

小島熱子

横浜歌人會に入會したのは今から十六、七年前だつたらうか。馬車道十番館で行われる新年歌會には大方出席していたように思ふ。

この度、運営委員十四名の中のひとりに任命され

た。今迄の組織のあり方や、運営方針など、横浜歌人會の歴史を踏まえ乍ら、メンバーの意見を伺いつつ責任を果たしてゆきたいと考えている。

横浜歌人會のレーゾン・デートルは横浜にあること、超結社の會員から成り立つてゐることの二点にあると理解している。横浜という都市の今迄知らなかつた歴史や貌を知り、その地域性を大切に、また超結社であるゆえに自由で多様な価値観などを知ることによつて各々が自分の短歌世界を広く豊かにするきっかけが得られるのではないかと考える。

そういう意味では近年の新年歌會、観月會、文学散歩及び即詠歌會、研究会等、各々に実りあるものになつてゐるように思ふ。特に研究会は短歌とは離れた世界を覗くことにもなり、私のような者には短歌のみの視野狭窄を防ぐためにも有難い企画である。今後どのように横浜歌人會が歩んでいくのか私にはまだ分からないが、會員の意見をよく聞く開かれた會でありたい。

そして当然ながら「短歌」を共通認識としての事業計画であり、親睦であるということを自覺して任期を全うしたいと願つてゐる。

力不足ですが頑張るつもりです。皆様の御協力をよろしくお願い致します。

自分らしくいられる場

高橋みずほ

横浜に来て、もう二十二年が過ぎようとしてゐる。こんな時に時が経つたのかとしみじみと思ふ。

横浜歌人會に入會し、運営するという立場で参加するようになり四年が過ぎた。この土地をより身近に感じるようになったのも、歌人會で昔から住んでゐる方々の土地の歴史、経験からくる作品やお話に触れたからだ。少しずつ土地の人となつてゆく、根ついてゆくということとは、このようなささやかな出会いを通してなのかもしれない。

先日、第四回文学散歩がキンピール生麦工場で行われた。穏やかな晴れた空のもと、會員一人ひとりの笑顔が、輝く緑のなかで眩しかった。歌會では、作品をお互いに理解したいという思いがひしひしと伝わつてきた。人に、事に向かおうとする素朴な姿があつた。

互いに在るなかで、何を高めていこうとするかを個々に思いやる、その思いが多いほどよい会になれる、そんな気がする。

改革を旗印に、四年前新たな一步を前代表の千々和久幸氏が切り開いてくれた。それを引き受けて、そして次へとつなげる。そのために、よいつなかりを育んでゆける真剣で、楽しい場がもてるようにしたいと思ふ。

短歌を通して、いま生きている土地で結びつく。表現にかかわるわたしたちが広く心を開いていけるように、あの穏やかな横浜湾が海原に向かい、波音に耳を傾けているように、自分らしくいられる場をみんなで築いて

ていきたいと思う。

伝統の流れの中に

佐波洋子

横浜に転居して九年が経った。十年目を歩み出したと思うと感無量だ。老齡の親の介護に通う都合や夫の病氣などで娘の近くに越して来たのだったが、一ヶ月程で親も亡くなり、納骨が済んだ頃、横浜歌人会に中川佐和子さんが誘って下さった。入会して早々に事務局長の清水鉄次郎さんから『横浜の歌人たち』刊行の準備をしているからすぐ原稿を送るようにとご連絡を頂いた。滑り込みで参加させて頂いたのが昨日の事のようにだ。

やがて千々和代表になられ、運営委員に加えて頂いたが、そのお陰で歌人会の活動をする事が個人的にも横浜に愛着を持たせることになった気がする。観月会、山手の即詠会、クルージングなどで横浜の魅力に触れ、それまでの観光の対象から自分の住む横浜として身近に実感できるようになったのは有難いことだった。しかし、実際には、委員会や行事の日程が他の団体の仕事や教室などと重なることもしばしばで、欠席する事も多くて残念に、また、申し訳なく思っていた。それもこの五月で別の役職の任期が終わったのでいくらか好転するかもしれないと思う。

そして、千々和代表から平野代表になられ、横浜

歌人会はまた新たな局面を迎えた。伝統あるこの会の流れの中に、たまたま縁あつて一員として加えていただいたことを大切にしたい。これまでの厚みのある歴史に新たな歴史を加えてゆくのは一人一人の歩みにかかつていようが、その歯車を動かす地道な活動に微力だが貢献できれば嬉しい。

さすらいびんごのひまぎや

真鍋 正男(波濤)

横浜歌人会には、これまでお世話になるばかりだったが、今年の三月末日で、ようやく全ての職務から解放され、自由の身となった。毎日が休日と言う生活に戸惑うことも多く、生活のリズムを作ることに苦心している。それで、電動自転車のバッテリーを業務用のものに改め、金沢区を中心に、鎌倉や逗子、葉山などに観察ポイントを拡げ、撮影機材を積んで、町探検や自然観察を続けることにした。先日は、三浦半島最高峰の大楠山にも自転車で登った。自転車なら、地形や風の変化をじかに感じることができる。近くの野島公園の展望台には、お散歩感覚で簡単に登れる。展望台からは、横浜南部が一望でき、横浜市が明治政府の国策によつて人為的に作られた町であることがよく分かる。横浜には三百七十万人市民の水源となる大河が無い。水源は、道志川・相模湖・馬入川・酒匂川・相模川など、他都市に依存し、長大な水道導管を引いて賄っている。水道導管は、大震災に耐えられても、ミサイルを打ち

込まれたら、ひとたまりもない。防衛が最も難しい海岸線に原発を五十四基も並べておいて、食料自給率三十九%の国が戦争をしたがるなど、最近の政治の動きは、どうかしているが、特に、横浜の場合は、水源ひとつ見ても、絶対平和都市であり続けるべきだと思う。運営委員のひとりとして、非力ながら、お役に立つことができればと願っている。

会員歌集紹介

本多豊明歌集『花檣』

後藤恵市

この歌集は第二歌集『朝念暮念』に続く第三歌集で、平成十六年から平成二十四年までの作品を収録したとのこと。この歌集には日々の生活を静かに、豊かに詠った透明感のある作品が多く含まれている。ごく普通の表現にも拘わらず、的確な描写力に裏打ちされている作品が多く、正確な文語の運用力と豊富な語彙力に支えられている。八十歳代を生きる一人の男の日々の心のゆらめきが、それを読む人間の心にも共鳴する。奇を衒わず修辭に走らない実直な表現が、作者の生活者としての真実性を強く印象づける。

それでは具体的な歌について述べる。

・つくばひに意思ある如く張りつめし氷の上には日当たたりをり

蹲踞に硬く張りつめた氷。「意思ある如く」がそのカチカチさ、冬の厳しさを良く表現している。結句の「日は当たりをり」との穏やかな着地も良い。

・露霜の畑に残れる大根のなほ瑞々と青き首見す
白い朝の霜がまだ残っている大根畑に、首の青々とした大根が並んでいる。何か絵になるような光景で、良いところを発見したと思う。何でもぼーっと見過ごしてしまつと、こういう歌は詠めない。

・妙香池の静かなるかな真昼どき蜻蛉の聲となめ帖とめきらめきて飛ぶ
平日に円覚寺を散策していたのであろうか、人気がない静かな昼時の妙香池をトンボが番つて飛んでいる、との属目詠。「静かなるかな真昼どき」と「蜻蛉の聲帖」。この二つの言葉が日常の光景を詩的に昇華している。

・灯を消せば金魚たちまちささやくか窓辺に今宵ア
ンタレス見ゆ
「灯を消せば金魚たちまちささやくか」これは一種の感覚表現なのだろうが、直感的に納得できる。金魚鉢の金魚が周囲が暗くなる事によって、何かメルヘンチックなものに窺変する。窓辺の赤いアンタレスと相まってとても幻想的に仕上がった一首。

・高階の冬のもしび見つつ来てそこに安らふ人ら
思へり

私も高層マンションに住んだことはなく、この感覚はよく理解できる。冬の夜、はるか空高くに命の灯りがともされている。何か不思議な感じがして、そこでの生活に思いを馳せている。

・孟宗竹の林の中の鬼子母神くらきここにも筍が生
ゆ
竹林のなかに鬼子母堂があったのだろうか。何となく無気味な上句であるが、「くらき」ここにも」との第四句が一首を転回させて、温かみのある結句へと繋げている。何か忘れられない一首である。

・虎落笛聞きある妻と思ひしがかすかな寢息にこころ安らぐ
長年連れ添った妻への静かな思いやりが感じられる歌だが、そういう妻と言えどもやはり別な人間なのだ、ということも詠われており、なかなか深い処を詠んでいると思う。

・金木犀の花をふちどるにはたづみ朝の光に匂ひ放
つり
金木犀の橙色の小花が散って庭の水たまりを縁取っていて、そこに朝日が差し込んでいる。視覚印象の鮮やかな作品。また結句の「朝の光に匂ひ放つり」により視覚から嗅覚への転換が自然にスムーズに行われ着地している。

以上のように作品の多くは属目を写真したものだ

が、写真の向こうの不可視の領域を感知しようとする作者の内面が伝わり、じっくりと読むべき歌集である。

編集後記

・新体制での第一回目の会報を発行することができました。皆様のご協力に感謝致します。

・新年歌会は例年通り、馬車道十番館にて盛大に和氣藹々と実施されました。

・文学散歩・即詠歌会は今年は生麦のキンビール工場でした。試飲のビールに喉を潤し、即詠歌会に臨みました。

・会報の構成にご意見・ご希望がございましたら、是非とも左記平野あてご連絡ください。

・会員の皆様で、歌集を上梓される方は右記平野あてご贈呈ください。会報にて歌集の紹介をさせていただきます。

・新しい振替口座（郵便局）は左記の通りです。
00230-0-52137

発行日 平成二十六年六月十日

発行人 横浜歌人会 代表 平野久美子

〒245-0066 戸塚区俣野町

1403-11-206

編集人

後藤恵市

〒236-0046 金沢区金利谷西 1-46-6

Tel・Fax 782-8778

address kg4238@n.jcmet.jp